

都市工学科50周年 卒業生の声

寄稿者一覧 (2013. 1. 10時点)

(☆：新着)

(3回生) 石川忠男

(3回生) 澤井安勇

☆ (3回生) 本間邦興

(6回生) 前田正博

(6回生) 室井 明

石川忠男（3回生）

「都市工の思い出」

私が都市工学科に進学したのは昭和40年10月、まだ卒業生も出ていない、出来て間もない頃だ。学科の科目も建築、土木、都市計画、衛生工学など様々であった。都市工学としての学問体系はまだ出来ていなかったのではなかろうか？岡本太郎画伯の講義では「悪人になれ、それも大悪人でなければならぬ」という主張を聞かされたし、試験では「君の今朝起きてからの行動を書け」など変な問題も出た。

しかし先生方は新設学科をどう発展させるか相当苦心したのではなかろうか？その熱意は学生にも感じられた。医学部や経済学部の先生を呼んでの講義もあったのは幅広く学べという意味だったのだろう。

学問体系がない分複雑な課題に対する問題解決能力が養われた気がする。それは私にとっても建設省に入ってから相当程度役に立った。

卒業生がいわゆる専門分野だけではなく、大蔵省、外務省、自治省、経済企画庁や、民間でも銀行や保険などの金融関係をはじめ幅広い分野で活躍していることからわかる。今後ともそれが通じるかどうかはわからないが、都市工が幅広い分野に人材を供給してくれることを楽しみにしている。



澤井安勇（3回生）



都市工学科が創設されて50年の大きな節目を迎えることとなった。今年2月の同窓会45周年記念総会を同窓会長として迎えた時にも感じたことであるが、昨今、かつて学生時代にお世話になった教職員の方々や、同じ時代を共に生きてきた多くの友人・同窓生の姿がいつの間にか見えなくなり、気がつくと、元気で頼もしげな、しかしどことなく世代間ギャップを感じる後輩達の姿が目に入る機会が多くなった。改めて、半世紀という時の流れの大きさ、重みを感じている今日この頃である。ところで、これまでの都市工卒業生の就職先（大学関係を除く）をみると、官公庁・公益団体等32%、コンサルタント等16%、建設・不動産15%、商業・サービス等13%、金融・保険11%、運輸等9%などとなっており、官公庁・公益団体等もほぼすべての省庁及びその関係機関・団体をカバーしていることを考慮すれば、フィジカル、ノンフィジカルに関わらず極めて幅広い社会分野に進出していることが特徴となっている。政治・経済・社会のあらゆる機能が重層的に絡み合っている現代都市のガバナンスは、そうした都市機能の各パーツを担っている多様なアクター（ステイクホルダー）達のネットワーク関係で成り立っていることを想いおこせば、都市工同窓生の現状は、正に現代の都市ガバナンスを支えるマルチ・ステイクホルダー関係の縮図と言えるかもしれない。願わくば、今後とも都市工学科の後輩達が、其々の分野でその個性を存分に発揮して都市の多様性、文化性、創造性などを体現しつつ、様々な形で建設的ネットワーク関係を築き合い、都市のグッド・ガバナンスを実現する大きな推進力になってもらいたいものだ。

本間邦興（3回生）

都市工学科の未来

私が大学に入った年に都市工学科ができた。

都市工学は戦後の‘復興期’を越えて、新しい日本の社会構造を展望する時期につくられた。この前後に東京オリンピックと大阪万国博が開催されている。工学として対象となる‘都市’は目の前に広がる‘空間’ばかりでなく、未来を見据えた‘新しい’空間でもあった。

そのために、新しい学問として標榜されたことが、いわく‘学際’であったり、‘総合’であったりした。これはかなり欲張りなことである。既存の‘統合力’やintegration systemのないところで、部分や、場当たりのこと、単なる思いつきになることを、散らかして、総合的に展開しようという試みだからである。学生運動のような情緒的な運動に共鳴するのも、そこに新しい価値観や方法論のひとかけらでもないかに関心を持ったからである。

この反省として、‘総合的’なことを追求するのは幻想だと思い、着実に一つ一つの分野を確定して、‘学問的’な体系を作ろうとする‘地道’な動きができてきたことは防ぎようがない。近年この傾向がなお顕著である。

今、‘都市工学’の課題はさらに広がりつつある。原子力・エネルギーの課題を含んだ‘防災’は今後の日本の浮沈をかけたテーマになってきている。‘公害問題’からはじまった‘環境問題’は、一層の地球的な課題を担っている。ユーティリティーやインフラの課題はつきない。地方都市や都心部の再開発も急である。

全体性を持った認識をもち、これらに対処していくことは、政治や経済のみ求められるものではない。都市工学は、外延化にひろがるテーマに分化するばかりでなく、‘統合性’を色濃くした都市認識と空間づくりへのアクションプランの確立がさらに重要になってきている。

後、50年かかってでもこのような‘総合’学問への道を歩んでいきたいものである。



前田正博（6回生）

「自由な学風」

都市工学科に進学したのは入学試験が中止になった年です。東大闘争の中でも都市工学科は一定の位置を占めていたこともあり、まだその余韻がたっぷり残っていました。

そのせいか必修科目も無く自由に単位を取ることができ、経済学部や文学部へ潜り込んだりもしました。こう書くと良く勉強したように思われますが、マージャンやアルバイトなどで結構忙しくしておりました。その中で計画系と衛生系と一緒に取り組んだ隅田川浄化対策を評価する共同研究は、その後の進路にも影響する印象深いものとなりました。

その縁もあり下水道という目に見えづらい都市インフラの運営事業に長年かかわることとなりましたが、専門のタコつぼに陥ることなく（というより陥ることが出来るほど能力がなかったのではと思いますが）、鳥の目線が持てるようになったのは自由な都市工の学風のおかげかと思います。

今では当たり前ですが進路の多様性も学科の特徴でした。先輩も含めそれぞれ自由に進路を選んでいましたので、思わぬところで助けられたり、ときには助けたりと多様性の恩恵を受けました。また先生方にも多くの支援を頂きました。

品川駅前にある昭和の初期に建設した東京都下水道局の芝浦水再生センターの施設の上部利用は、構想計画段階から事業段階まで様々な議論を重ねました。この間都市工学科の先生や卒業生の皆様に助言いただき大変お世話になりました。おかげで無事着工し2年後の平成26年には素晴らしい環境配慮型のビルとしてオープンします。完成を心待ちしています。

最近では少し暇になったのか同期のメンバーが集まる機会が増えてます。先週のゴルフの会は、腰痛などで4名が不参加となりました。そんなこともあり打ち上げでは健康の話題が中心でしたが、まだまだ社会貢献にも意欲満々のメンバーでした。

都市工学科50周年、皆様のご活躍をお祈りします。



室井 明 (6回生)

私は、昭和四十六年関西の会社に入社した。当時は、関西に都市工出身者は二十人位しかいなかった。そういう訳だから、どこでも「都市工ってなんや」と説明を求められた。そういう時はこんな説明をした。「土木・建築学」、「社会学」と「未来学」を足して三で割ったような学問で、一言でいうと社会の先を読む「先師（サキシ）」だと。実は、この表現、三年上の先輩から教わったのだが、私は気に入ってよく引用させていただいている。アルコールの入った席では、いつの間にか「先師」に「濁点」を付けられてしまい、よく冷やかされた。軽口はさて置き、都市工から「先」の見方、読み方、創り方を学んだように思う。

会社での仕事は、「技術や」でなく「事務や」で仕事をしたいと自分から希望した。当初は都市工とほとんど縁がない仕事が多かったが、二十年程経つと、地域振興、都市開発、都市再生などの業務に関わることが多くなった。地域の基幹産業として、あるいは経済界の一員として、時には地権者として、立場はプロジェクトにより異なる。例えば、大阪駅北地区、大阪中之島エリアの再開発、水都大阪再生など大阪のビックプロジェクトを経験する機会を持った。困った時は、各方面に先輩、後輩がいて大いに助かった。こんな所にもと驚くほど実に多彩な分野に卒業生がいる。こんな幅広い学科は珍しい。大学では先生方から、「都市工はインターデシプリナリーな分野でそれが学科の特徴だ。必須科目が無いのもそういう趣旨だ。」と言われたが、卒業生が活動するジャンルも正に学際的である。最近では、都市工出身と自己紹介すると、「じゃあ、私の知人の〇〇さんと同じですね」と返事が帰ってくる等、存在感がある学科になったように思う。

最後に後輩諸氏に一言。人的ネットワークは貴重です。是非、都市工のインターデシプリナリーなネットワークを生かしてご活躍下さい。
